

英語における転換についての一考察

—過去30年の「動詞化された名詞」から—

市川真矢

1. はじめに

歴史上、英語圏の拡大に伴い、英語は多くの借用語を受け入れることとなり、その結果、膨大な語彙を持つに至るが、英語自体の語形成の過程の中にも派生 (derivation) や複合 (compounding) をはじめ、きわめて新語の生産力に富むものがある。本稿では、そのうち「転換 (conversion)」、とりわけ「名詞から動詞への転換」に焦点をあて、過去一世代という短期間にも、時代を反映して多数の新語が産出されていることを概観したいと考える。

2. 転換

2.1. 転換

転換 (conversion) とは、語形成の過程の1つで、接辞付加を伴わないで語の品詞を変えることである。たとえば、名詞の fish (魚) に対する動詞の fish ((魚)を釣る) は、名詞から動詞への転換と考えることができる。

次のような比例式が成立すると考えてみよう (A, V は、それぞれ形容詞 (adjective)、動詞 (verb) を表すものとする)。

$$(1) [\text{legal}]_A : [\text{legalize}]_V = [\text{clean}]_A : [\text{clean}]_V$$

legalize (合法化する) という動詞は、legal (合法的な) という形容詞に、動詞を造り出す接尾辞 -ize が付加されてきている。それと同様に、clean (きれいにする) という動詞は、clean (きれいな) という形容詞に、動詞を造り出す接辞であるゼロ形態素 (zero morpheme) が付いてできている、と考えることができる。すなわち、音形を持たない抽象的な接尾辞を仮定し、その付加によって品詞の転換が起こるものとすれば、派生 (derivation) の一種と考えることができるということである。

$$(2) [\text{clean}]_A \rightarrow [[\text{clean}]_A + 0]_V$$

このため、転換はゼロ派生 (zero-derivation) と呼ばれることもある。(Marchand 1969, p.359)

2.2. 転換の方向

2.2.1. 転換の基本形と派生系の区別の基準

転換は、具体的な形をした接尾辞が付加されないので、転換が生じていると考えられる例を見て、どちらの品詞のものが基本形で、どちらが派生されたものか区別することが難しい場合がある。例えば、Quirk et al.(1985) では、名詞としても動詞としても機能する paint (ペ

ンキ、ペンキを塗る)と paper (紙、紙で包む)を挙げ、母語話者はともに名詞から動詞へと転換が起こったと感じるけれども、実際、歴史的には paper はその通りであるが、paint は逆であると述べられている。こうした例はあるものの、転換の基本形と派生系を区別する基準はおおむね次のように述べることができる。

(3) a. 意味に基づくもの

転換の対をなす語のうち、一方を定義するのに他方の語を用いなければ定義できないか、または定義しにくい場合、後者の方が基本形である。

b. 形態に基づくもの

接尾辞はそれぞれ特定の品詞を派生する働きを有するが、そのような接尾辞を有すると分析されるにもかかわらず、別の品詞として機能している場合は転換が生じたと考えられる。

(3a)の例を考えてみよう。動詞の net(網で捕らえる)の意味を定義するとき、名詞の net(網)を用いれば簡単にできる('put into a net')が、その逆は難しい。

(3b)においては、例えば commission (委任された権限)は名詞を示す接尾辞を有していると分析されるのに、commission (権限を委任する)という動詞としても用いられる。この場合は名詞が基本形であると言える。ただ、こうした例は、接尾辞が付加される前の動詞とは意味が異なり、特殊化された意味を持つことになる。

(4) commit → commission → commission
 (ゆだねる) (委任された権限) (権限を委任する)

例えば、名詞 arrival を動詞として用いるために転換するというようなことが起こらないのは、元の動詞 arrive と実質上異なる意味を表すとは考えられないからである。

2.2.2. 転換に伴う強勢の移動

ロマンス語起源の2音節からなる名詞と動詞の対は、しばしば強勢の位置が異なっており、動詞では第2音節に強勢があり、名詞では第1音節に強勢がある。Marchand (1960)、Quirk et al.(1985)では、名詞から動詞へ転換されたときは強勢の移動は生じないが、動詞から名詞へ転換された場合には第1音節への強勢の移動が生じることがあるとされている。したがって、強勢の移動がない場合は、名詞から動詞へ転換されたのか、動詞から名詞へ転換されて強勢移動が生じなかったものか不明であるが、強勢の移動がある場合は、動詞から名詞への転換と考えられる。

(5) condúct → cónduct
 (行動する) (行動)
 contrást → cóntrast
 (対照する) (対称)

また、このように名詞であるか動詞であるかにより強勢の位置が異なる対に関して興味深いのは、ある特殊化された意味のとき、名詞の強勢型を有しながら、動詞として用いられるということである。

- (6) a. abstráct (抽出する)
 ábstract (抜粋)
 ábstract (抜粋する)
- b. discóunt (考慮に入れない)
 díscout (割引)
 díscout (割引する)

こうした例は、意味的基準や、名詞から動詞への転換の際に強勢が移動しないことを考えると、名詞から動詞への転換が生じていると言える。したがって、(6)の例は上から下へ、それぞれ動詞→名詞→動詞という転換が生じたと考えられる。

2.2.3. 固有名詞からの転換

基本形を見分けやすい例としては、固有名詞からの転換がある。定着して、すでに大文字で書き始めたりすることのない例でも、名詞から転換されたことは容易に理解できる。

- (7) boycott (ボイコットする [人名から])
 lynch (リンチを加えて殺す [人名から])
 meander (曲がりくねって進む [川の名から])
 shanghai (無法な手段で船に連れ込んで水夫にする、強制する [地名から])
 japan (漆を塗る [地名から])

固有名詞をまだ強く意識していて、書くときも大文字で始めるような語では、なお容易に固有名詞からの転換だと理解できる。

- (8) The Canoe Titanicked on a rock in the river. (カヌーは川で岩に衝突沈没した。)

2.2.4. 閉じた類から開いた類への転換

もう一つ基本形が自明な例は、閉じた類から開いた類への転換である。このタイプは生産力は高くなく、用例も限られている。

- (9) 接続詞→動詞、名詞
 But me no buts. (「しかし、しかし」と言葉を返すのはやめてくれ。)

助動詞→名詞
 a must (絶対必要なもの、必ず見る・聞くべきもの)

疑問詞→名詞

the how (方法) /the why(s) (原因、理由)

2.3. 転換の型

2.3.1. 転換のもとになる語

転換のもとになる語には、単純語の例が圧倒的に多いが、複合語、派生語、頭文字語、混成語などもあり、形態的には制限がないと思われる。

(10) 複合語

[soundproof]_A → [soundproof]_V
(防音の) (防音装置をほどこす)

[data bank]_N → [data bank]_V
(データ・バンク) (データ・バンクに記録する)

(11) 派生語

[monthly]_A → [monthly]_N
(月1回の) (月刊誌)

[weekly]_A → [weekly]_N
(週1回の) (週刊誌)

(12) 頭文字語

[UA]_N → [UA]_V
(ユナイテッド航空) (ユナイテッド航空で行く)

(13) 混成語

[smog]_N → [smog]_V
(スモッグ) (スモッグでおおう)

[motel]_N → [motel]_V
(モーテル) (モーテルに泊まる)

2.3.2. 転換の主要な型

転換は新語を供給する仕組みであるから、開いた類の語を作ることが基本的に守られており、名詞、動詞への転換が見いだされる。主要な型は、(14)に示す四つである。

(14) N → V

A → V

V → N

A → N

3. 過去 30 年に動詞への転換が起こった名詞

時代の経過とともに新しい物事や生活様式が生まれてくることを考えると、(14) にあげた転換の型の中でも、「N → V (名詞から動詞)」がことに生産性が高いと思われる。本章では、McFedries (2004) および McFedries が主宰するウェブサイト Word Spy に収録された用例をいくつか見ていく。

(15) 固有名詞からの転換

- google: ウェブ上で、(特に Google の検索エンジンで) 情報を検索する；新しいガールフレンドやボーイフレンド (あるいはガールフレンドやボーイフレンドになりそうな人) に関連した情報を探してウェブを検索する

(Google Technologies Inc. の検索テクノロジーおよびサービスの登録商標名から)

- Amazon: インターネット上の存在感において第 1 位となり、これまでの支配者から仕事を奪う

(企業名から：この動詞の誕生には、1999 年 5 月の段階で Amazon.com がインターネット上の書籍販売市場において 75% のシェアを獲得したのに対し、書籍小売業の巨人 Barnes and Noble が 15% しか占めていないという状況があったと McFedries は述べている。)

- Dell: 中間業者を飛ばして、直接、消費者に商品を販売することにより、競争手を打ち負かす

(企業名から：Dell Computers が直接販売を利用して、世界のコンピューター製造のトップ・メーカーの一つになったことから。)

- MacGyver: 手近な材料と道具を巧みに使ってあるものを発明あるいは作り変える

(人名から：80 年代のテレビ番組の主人公で、陥った危機を手近な材料と豊富な科学知識の応用で切り抜け、数々の事件を解決する。McFedries は次のような文例を挙げ、この人名が形容詞としても働くとして主張している。: When he teaches bachelors, Urbanetti chips away at this fear by leading students in what he calls “**MacGyver** cooking” - taking whatever vegetables and condiments they have on hand and putting them on a pizza crust. - Emily Shartin, “Singling out meals to cook for just one, “The Boston Globe, March 7, 2007)

- Harold: 墓地をうろつく

(人名から：映画 Harold and Maude の主人公の若者 Harold は、死に取り憑かれ、墓場で時間を費やす。)

(16) 複合名詞からの転換

- Ctrl-Alt-Delete: あることをリセット、再起動あるいは再考する

(パーソナル・コンピューターの3つのキーの名称を連結しており、複合名詞が動詞化したものと考えてよいと思う。この動詞は、IBMの最初のPCを、ユーザーがこの3つのキーを押すことで再起動するようプログラムを組んだDavid Bradleyの引退声明に触発されたものとMcFedriesは述べている。)

• Alt-Tab: 動作中のコンピューター・プログラムを別のプログラムに切り替える

(この動詞も、成り立ちは上述のCtrl-Alt-Deleteと同じく、複合名詞が動詞化したものとみてよいと思う。Windows PCにおいて、プログラムを切り替える際のキー・コンビネーションに由来する。)

• showroom: 商品を見たり調べたりするのに小売店を利用し、その後、その商品をインターネットでより安く買う

(17) 頭文字語からの転換

• Nasdaq: 価値あるいは量が急激に減少する

(National Association of Securities Dealers Automated Quotationは1971年に全米証券業協会(NASD)の主催で開設されたアメリカ合衆国にある世界最大の新興企業向け株式市場である。)

(18) 単純語からの転換

英語学習の初期に出会うような基本的な名詞が、新しい時代の物、生活様式、現象などに関わる新たな意味を持って動詞として使われるようになる例が少なからずある。

• text: メッセージを書き、送信する

(携帯電話やスマートフォン等で、メッセージを書き送信する。)

• friend: ソーシャルネットワークワーキングのウェブサイト上で、ある人を自分の知人のリストに加える

• chip: マイクロチップ(microchip)、とりわけRFID(radio frequency identification: 電波を使って物品や人物を自動的に識別するための技術)の発信機を動物や人の体に埋め込む

• elder: 自分よりも若い人々と知恵や知識を共有する

• door: 自動車のドアを思いがけず開いて自転車に乗る人を衝突させる

• street: 精神療法の病室が利用できないため、危険あるいは無力な精神病患者を病院から放す

• salmon: 交通の流れに反して自転車に乗る

(産卵時の鮭の遡上を念頭においていると考えられる。)

4. 考察

英語の発達史から見ると、英語は時代の経過とともにゲルマン語が本来持っていた屈折(inflexion)を喪失・簡略化し、述語動詞とその項(argument)との関係を屈折接辞ではなく、語順によって表現する言語へと変貌してきた。借用が盛んに行われたことや、本稿で概観した転換の用例が豊富に存在することは、こうした事情が背景にあると考えられる。

第3章にて取り上げた McFedries(2004) およびウェブサイト Word Spy から引用した名詞から動詞への転換の用例は、同書およびウェブサイトに収録されているもののごく一部に過ぎないが、ウェブサイト Word Spy においては、特別に「Verbed Nouns」というカテゴリが設けられており、新語の形成において、この型の転換がとりわけ豊富であることをうかがわせる。

過去30年はパーソナル・コンピュータとインターネットの一般への普及の時代と重なり、用例もこの分野に関するものが多い。一見してコンピュータ用語からのものと分かる語もあれば、英語の本来語(native word)に、コンピュータあるいはインターネット関連の意味が新たに付与される例もあり、興味深い。ただ、この分野の技術革新はきわめて速いため、現在ある企業やサービス、機器の形態が長きにわたって存続するか否かは不透明で、したがって、この時代に生まれた新語や本来語に新たに付与された意味が長く使用されるか否かも同じことが言える。

参考文献

- Hashimoto, I. 2005. 『英語史入門』 慶應義塾大学出版会
- Kageyama T. (影山太郎) & Y. Yumoto (由本陽子). 1997. 『語形成と概念構造』 (日英語比較選書) 研究社出版
- Marchand, H. 1960. *The Categories and Types of Present-Day English Word-formation: A Synchronic-diachronic Approach*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- McFedries, P. and Logophilia Limited. 1995-2014. *Word Spy: The Word Lovers' guide to New Words*. <http://www.wordspy.com/>
- McFedries, P. 2004. *Word Spy: The Word Lover's Guide to Modern Culture*. New York. Broadway Books.
- Nakao, T and M. Trajima. 1988. 『図説 英語史入門』 大修館書店
- Namiki, T. (竝木崇康) 1985. 『語形成』 (新英文法選書) 大修館書店
- Oishi, T. (大石強) 1988. 『形態論』 (現代の英語学シリーズ) 開拓社
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London. Longman
- Terasawa, J. 2008. 『英語の歴史 過去から未来への物語』 (中公新書) 中央公論新社